

FILE No.15

フジ35

取材=大橋且典(ヴァンデスユタット大橋)
協力=編集部



ちょっと気になる帆古いフネ

日本から世界へ

1960年代、横須賀のファーイーストヨットという造船所が、クラシックスタイルのセーリングクルーザーをアメリカに大量輸出していた。この会社は1970年頃廃業したが、その後をフジヨットが引き継いだ。

フジのシリーズは32、35、40、45と全部で4艇種である。今回の主題のフジ35は創業時からのモデルで、合計110艇強が建造された。そのほとんどはアメリカに輸出されたが、20艇くらいは日本に残ったとされている。

クラシックスタイル

フジ35のスタイルは、まさにクラシックである。趣のあるクリッパー・バウには、チーク製のバウスプリットがついている。リグはケッチで、フォアトライアングルにはブーム付きのインナージブを備え、ハルの水面下はデ

ィープキールである。これに箱型キャビンハウス、チークのブルワーク、同じくチーク製手すりのプッシュピットが付き、コクピットには後面側壁から突き出したウォームギアタイプのステアリングホイールまで備えている。

内装には、ふんだんにウッド(取材艇の場合はマホガニー)が、それも場所によってはムク材が多用されている。実際はハル、デッキともFRP構造なのだが、一見、木造船と見まがうばかりの出来である。当時のアメリカ市場で多数が売れ、いま現在の日本でも根強い人気を保っている理由は、このスタイルにあるものと思われる。

取材艇〈スターダスト〉のオーナー、山田誠治さんに、フジ35の魅力をうかがった。「当時サンティアマリーナ(淡路島)にあった1979年製の110号艇を、1985年に購入しました。購入当時のフネの状態は、必ずしも満足できるものではありませんでした。当時はフジヨットの工場も、このフネを造った職人たちもまだ横須賀に存在していましたので、そちらにドックインして整備してもらいました。

フジ35は、私にとって最高のクルージングボートです。特に内装のウッドワークが気に入っています。折り畳み式のメインテーブルとセットになったウイスキー・バー、スライド式のセティーバース、天井コーナーのムク材

などすべてがよくて、キャビンにいると実際に落ち着くのです。

壊れない、頑丈だ、という安心感も大きいです。乗っていても楽です。ディープキールなので、保針性がよくて安定しています。ただ、いわゆる帆走性能はよくありません。当時の英文カタログには『フジ35ディーゼルケッチ』とありますから、そういう(エンジンに重きをおいた)フネだと理解しています。でも、微風はダメですが、風さえ吹いていれば走りますよ。特に横からとか後ろからの風ならご機嫌です。ディープキール艇の後進操縦性能の不安定は確かに問題ですが、プロペラの回転横力をうまく逃がしながら操舵すれば、つまり工夫すれば解決できます。

デッキ上では、ウォームギアを利用したステアリングシステムが気に入っています。動きが実際に滑らかで、システムが非常にシンプルなところがよいですね。ブーム付きのインナージブを展開すると、ダブルヘッドラグとなります。これは、クラシックな雰囲気が出てよいのですが、性能はいまいちなので、普段は大きなオーバーラップのファーリング・ジェノアを使用しています」

フジヨットというビルダー

関西フジヨット(株)社長(当時の)小堀辰氏に、当時のフジヨットについてうかがった。





a



b



c



d

a ウッドの雰囲気がムンムン漂うメインキャビン。手前が入り口で、入って正面が山田さんご自慢のウイスキーロッカーだ。天井にはニス塗りのウッドビーム。セティー背当て上部の棚は、扉も内部の壁もバラ打ちで仕上げてある

b チーク張りのコクピット。中央がミズンマストで、その後ろにウォームギア構造のステアリングホイールが見える。艇尾を囲むブッシュピットは、チーク製の手すりを備えている

c メインキャビンのテーブルは折り畳み式。畳めば、このようにウイスキーロッカーの扉となる。写真に見えているセティーは、座席を手前に引き出せば幅広バースに変身する

d 折り畳みテーブルの足は、すべてテーブル側にセットされているので、ワンアクションで収納／展開ができる

わが国のヨット量産の曙時代は、まだ日本円は安く、輸出産業真っ盛りの時代でもあった。

当然ながら、輸出（主にアメリカ）向けの造船所もいくつか存在した。

フジヨットはそんな輸出企業のひとつであり、

フジシリーズは今なおファンの多い高級クラシックボートである。

今日はそのうちのひとつフジ35を取り上げる。

大橋 まずはフジヨット（株）の生い立ちについてお聞かせください。

小堀 一般的のヨット界、特に最近の日本のヨット関係者はあまり知らないことでしょうが、1960年代に輸出産業として大成功したヨット会社がありました。名前をファーストヨットといつて、「マリーナ」というモデル名でクラシックヨットをアメリカへ大量に輸出していました。この会社は1970年ごろ廃業するのですが、その工場と人員の一部を受け継いで、同じ傾向のヨットを同じアメリカ向けに建造し始めたのがフジヨット（株）です。

大橋 小堀さんとフジヨットの出会いはどのようなものだったのでしょうか？

小堀 当時、私はヤマハに在籍していました。しかし、本来自分としては高級クラシックヨットに憧れていたので、それとは傾向の違うヤマハヨットには馴染めませんでした。1975年、結局ヤマハを辞めて関西フジヨットを設立し、フジヨットの販売を始めたのです。

大橋 フジヨットの特徴を説明していただけますか？

小堀 一口に言うと「高級木工ヨット」です。ハル、デッキともFRPなので、木造ヨットとは呼べませんが、それに近いものです。当時の横須賀の工場では何から何まで自家製、手造りで、自分たちの納得できる高いクオ

リティーを追求していました。つまり、アルミマストも素管から、ステンレス加工も板材から自分たちの手で作り出しており、チーク材などは原木が工場内にゴロゴロしていました。実際、特に内装家具類とか床板などのウッドワークや塗装は、使う素材もよくてすばらしい仕上がりでした。

大橋 フジヨットの国内販売総数はどれくらいでしょうか？

小堀 関西フジヨットは1978年に大阪チャタ販売と合流して、（株）135イーストとなりました。その135イースト時代を含めて私の売った新艇のフジヨットは、45が2～3艇、40が2艇、35が10艇、32が10艇くらいです。関東方面も同じくらいで、国内合計はこの約2倍ということになります。

大橋 顧客層や、ライバル艇についてはどうでしょう。

小堀 顧客の層は、価格が高いということもあって、当然ながら年配の方が多かったです。サイズで言えば、25～30ft艇からの乗り換えが目立ちました。ライバル艇は、ほとんどなかったと思います。競う相手はライバル艇ではなくて、顧客の予算でした。製品のクオリティーが高いことははっきりしていましたし、顧客がそのクオリティーを望んでいたことも事実なので、あとは予算が合うかどうかだけが商談成立の決め手となつたのです。

DATA FILE

- 全長：10.54m
- 全幅：3.05m
- 吃水：1.52m
- 排水量：7,390kg
- セール面積：58.52m²
- エンジン：ディーゼル船内機（25～50馬力）
- 新艇建造期間：1974～1979年
- 生産隻数：約110隻
- 設計＝ジョン・G・アルデン
- 製造＝フジヨット（株）

PRICE INFORMATION

- 昭和55年当時の新艇のベース価格：19,100,000円～

- 最近の中古艇実勢価格：

約8,000,000～15,000,000円

“高級木工ヨット”という性格を持つシリーズであるため、プロダクション艇とはいえない、ほとんどがセミカスタム艇に近い。内装の材料やレイアウトはもちろん、リクの種類にいたるまで、オーナーの意向が反映されているため、一艇一艇の個性はかなり異なっている。設備の度合いによっても、価格は大きく異なる。基本的に建造からそれなりの時間が経っているはずなので、艇を選ぶ際にはよく吟味したい。次項で紹介するフジヨットのファンサイトには、現在売られている艇の情報も掲載されている。（編集部）

※実勢価格については、中古艇販売業者数社に調査を行ったものです。艇の状態や、装備品の有無によって著しく価格は変動しますので、あくまで目安として考えてください。

USER'S VOICE

山田誠治さんの場合

フジ35歴：約22年

三浦半島の諸磯湾に浮かぶフジ35（スターダスト）のオーナーが、山田誠治さんだ。インターネットが世の中に登場し始めた時代に、リアルタイムで航海記をネット上にアップした元祖といってもいい人物だけに、ご存じの方も多いだろう。

「元々はカーターという30ftの船に乗っていましたが、やっぱり日本のクルージングポートに乗りたかった。自宅の裏に、輸出を待つフジヨットの保管場所があったこともあって、フジヨットには憧れがありました。たまたま出物を見つけたんですが、やっぱり価格は張りましたね。当時の価格で2,000万円近くしたから、5人の仲間で資金を捻出して購入しました」

実際に手に入れた後には、北海道や九州へのクルージングを何度もおこなったほか、ロシアのウラジオストクまでも航海している。

「アメリカにはフジヨットのファンが集まるウェブサイト（http://www.fujiyachts.net/）もあるんですよ。世界中で多くのフェスが、今も現役で活動している様子がよく分かります。造船所は今はもう存在していませんが、メンテナンスの方法など、ユーザー同士が活発に意見を交換しあっているので、いろいろな情報を得ることができます」

隅々まできれいに整備が行き届いた〈スターダスト〉を見れば、山田さんのフジ35に対する思いは十分すぎるほど伝わってくる。このフェスとは一生付き合っていきたいとも語っていた。（編集部）

